男たちが鍛えぬいた巨根　海へ　美女たちが待っていた

人生というものは頑張らなければならない。

無理をするほどの忍耐はタブーだとしても、怠けていて苦痛から逃れ逃れ、甘えていてはいつまで経ってもダメな状況からは脱することは出来ない。

だから、男たちは立ち向かい戦い抜いたのである。

これは、特定のものにばかり興味を持ち、女体への関心すら

抱けない、いや本音の奥底では抱いているがそれを自分のものと出来る欠片の術さえ持たないため、あきらめざるを得ずもはや関心を抱けない状況下にいた男たちがとあるきっかけで終結し滝修行、荒修行を行った物語。

彼らは山奥で、邪知と良心が表裏一体と化した地獄の閻魔、ピンク色の沙羅（しゃら）に出会う。

沙羅はほとんど全ての人が知ることのない浜辺を男たちに伝えた。

荒修行で、一度死んで蘇ったほどの苦しみを乗り越えた男たちに。

男たちは沙羅から手渡された薄汚れた紙切れの地図を頼りに遠くまで旅をする。

その道中でも、魔物にたびたび遭遇し、七転び八起きのなだらかな道ではなかった。

道なき道、というがそこをかき分けて進むというイメージが近かった。

そしてたどり着いた海。

男たちは、ポークビッツ、小さなウィンナーほどのサイズしかなかった下半身が巨大に巨大に成熟していた。

海の家で働く女体たちは、皆、びっちびちのビッチばかり。

ここは誰もが行ったことのない隠れ隠れた穴場中の穴場、

やることしか考えていない女たちばかりが好きな時に泳ぎ、四六時中燦々と照り付ける太陽の下ずっとずっと遊んでいる海であった。

（体験版はここまでです）